原 著

典型発達児のナラティブのストーリーの構造と内容の発達

小坂 美鶴

要 約：ナラティブは言語、認知、社会性の能力を含んでいる。本研究では異なる材料と課題を用いて典型発達児のストーリーの構造と内容の発達に関して横断的な検討を行った。4：01～6：11の典型発達児118名を対象として“Frog, Where Are You?”と“ぞうさん故郷に帰る”のストーリーを用いて、自発話課題と再生課題を行った。分析は材料および課題による差異を比較した。

その結果、ナラティブはすべての年齢で課題や材料によらず、ストーリーの長さや語彙数、統語において同一個人内での高い相関があった。また、両材料、両課題ともに年齢の増加とともに自立語数が有意に増加し、さらに内容も豊かになった。年齢群ごとの比較では4歳と5歳以上で有意な差異があり、4歳児においては十分なストーリーの内容を再生し、物語ることは難しいことが示された。しかし、5歳以上では徐々に材料による差異が明確になり、6歳では有意に材料間の差異があった。

言語の形式と内容は一体となり発達し、5歳以降でのナラティブの発達が認められた。課題や材料によらず、個々の産出能力は一貫していた。典型発達児のナラティブの発達の標準的な結果を示し、評価ツールとして有用であることを示すことができた。

索引用語：典型発達児、ナラティブの発達、ストーリーの材料と課題、物語の構造と内容

Narrative Development of Contents and Structures in Story Telling

Mitsuru Kosaka

Abstract: This study investigated development of narrative abilities through contents and structures in telling stories. The participants were 118 typically developing children (4: 01-6: 11). Two stories and two tasks were prepared. Each child was presented with 10 pages of a wordless picture book extracted from a story entitled, “Frog, Where Are You?” (Mayer, 1969). The other was an original picture story entitled, “A little elephant goes back home with his mother.” The children conducted spontaneous speech and retelling tasks. All narratives were recorded with an IC recorder and transcribed for analysis.

The results showed that the stories produced by the 4-year-old group contained fewer words and poorer content compared to the over-5-year-old group in both materials and tasks. There were some individual differences in relation to story lengths within the same age group. These findings suggest that children develop contents and structures in telling stories at the same time. Narrative skills have no relation to the materials and tasks. As a

group, children from 5 years old and above produce stories rich in structures and contents. The results indicated different narrative skills for each age in preschool.

Key words: typically developing children, narrative development, materials and tasks in telling stories, narrative structure and content

はじめに

子どもが言語を獲得し、対人関係の文脈のなかでコミュニケーションが可能になり始めると次にテキスト形成的機能の発達により、適切な表現形式が必要になってくる。文以上の単位である談話レベルでは、文と文の連接（結束性要素）が談話テキストの整合性との関連性において重要となる。一つ一つの文が的確であったとしても、文と文が結合した場合に意味的に的確になるかどうかは結束性要素の影響が大きい。ナラティブの理解や産出は、聞き手側の態度やどのように話しどのように導き出すか、内容の複雑さや構造的な複雑さ、内容のまとまりや形式的なまとまりによって個人差が大きい。

子どもは5歳までには多くの語彙と形態統語論的な構造を獲得する^{1,2)}。しかし、言語知識の獲得とその使用は学童期を経て成人まで続く。ナラティブを産出するためには原因や意図、空間、役割の関係の知識をもたなければならない。ナラティブの発達は言語、認知、社会性の能力のような多側面を含む。英語圏での談話研究は他の言語発達研究の領域と同様に質量ともに活発な研究が行われている。なかでも物語を語ることにに関して‘dinner table’のストーリー³⁾やMayer⁴⁾の字のない絵本“Frog, Where Are You?”などの材料を用いた研究がある⁵⁻⁷⁾。いずれも単に言語的側面ばかりではなく、異なった文脈や文化や時間を見ることが出来るツールとして研究されてきた。ナラティブは語彙や統語、使用などの言語能力の発達、さらに連続した出来事を構成し、記憶しておくこと、話し手と聞き手といった対人関係の能力を必要とするものであり、登場人物の客観的な評価や関係性の推測を物語の内外からの情報を用いて想像し、物語を創造することである⁸⁾。

また、近年増加傾向にある自閉症スペクトラム（以下 ASD）は言語能力と関連性の深い社会的推論の障害がその特性であり、意味論・語用論の障害を中心としている。そのなかでも言語形式（音韻や統語など）の障害を合併しないタイプにおいては、他の言語学的領域では問題を明確にすることができないことが多

く、欧米圏では ASD のナラティブの研究が増加してきている^{9,10)}。それに対してわが国では談話に関する研究および発達の順序や正常な偏りや変化に関しての示唆を与える文献は少なく、分析方法についてもいまだ確立されていないのが現状である。わが国の談話の発達研究では産出されたテキストそのものを分析した研究は少なく、学齢児の作文に関しての分析¹¹⁾、談話の長さや様式についての分析^{12,13)}などいくつかの報告にとどまっている。ナラティブの産出は単語や文に比べ典型発達においても個人差が大きくなると考えられる。日本語でのナラティブ研究のための基礎データが少なく、ASD 児や他の発達障害児のナラティブの産出の発達を比較研究するためにも典型発達児を対象とした研究には重要な意義がある。

海外での研究から幼児では談話内容や言語構造は経験を一般的出来事表象（General Event Representation: GER）によって影響を受け、幼児の GER は一般的なスクリプトモデルのなかで特徴づけられる¹⁴⁾。GER とは毎日の同じような出来事の記憶が抽象化され知識として表象化されることである。談話は子どもの体験に依存し、さらに認知・言語面の能力の差異を反映するのであり、そのためナラティブの産出はそれぞれの子どもの体験の違いを含め、認知や言語の能力の個人差が大きく影響する。それぞれの国の文化が異なることもあり、ナラティブに用いた材料によっても差異が大きいと考えられ、わが国の文化を反映した材料の検討は重要な要因である。

そこで本研究では海外で行われているナラティブ研究で使用されている材料である“Frog, Where Are You?”（以下 Frog）とわが国の子どもたちの早期語彙獲得語であるぞうを主人公としたオリジナルのストーリーである“ぞうさん故郷に帰る”（以下ぞうさん）を比較して、典型発達児のナラティブの横断的な検討ならびに材料による差異を検討した。

方 法

1. 対象

絵画語い発達検査（以下 PVT-R）¹⁵⁾において語い年齢（以下 VA）3 歳以上で発達障害の診断がなく、保

育上支障がない保育園児 118 名（4：01～6：11，男児 75 名，女児 43 名）とした。なお対象児は年齢ごとに 4 歳児，5 歳児，6 歳児と分け，さらに対象児のうち材料の違いで Frog の自発話課題とぞうさんの再生課題を行った A 群とぞうさんの自発話課題と Frog の再生課題を行った B 群に分けた。A 群の 74 名の対象児は 4 歳児群 29 名の生活年齢（以下 CA）の平均は 4：05（男児 10 名，女児 19 名），5 歳児 23 名（平均 CA 5：05，男児 16 名，女児 7 名），6 歳児 22 名（平均 CA 6：03，男児 12 名，女児 10 名）であった。B 群の 44 名の対象児は 4 歳児 14 名（平均 CA 4：06，男児 7 名，女児 7 名），5 歳児 15 名（平均 CA 5：05，男児 10 名，女児 5 名），6 歳児 15 名（平均 CA 6：05，男児 11 名，女児 4 名）であった。A 群 74 名の CA と VA との相関は $r=0.70$ ($p<.01$) であり，B 群 44 名の CA と VA との相関は $r=0.59$ ($p<.01$) であり，いずれも高い相関が認められた。それぞれの対象群の VA は A 群 4 歳児群の平均 VA 3：08（SD 7 ヶ月），5 歳児群の平均 VA 4：11（SD 11 ヶ月），6 歳児群の平均 VA 5：06（SD 15 ヶ月）であった。B 群の 4 歳群の平均 VA 3：09（SD 7 ヶ月），5 歳児群の平均 VA 4：10（SD 12 ヶ月），6 歳児群の平均 VA 5：07（SD 10 ヶ月）であった。

2. 手続き

材料は Frog とぞうさんの 10 シーンの色つきの系列絵を用い，A 群 74 名と B 群 44 名を比較した。なお，Frog については物語構造を壊さないように 24 シーンのオリジナルを 10 シーンのストーリーに短縮し，さらに色つきの絵とした。自発話課題では両材料ともに紙芝居形式で提示した系列絵 10 シーンをすべて見せた後に再度 1 枚ずつ提示しながらその話を話してもらうよう指示し，再び 1 枚ずつ提示し絵を見ながら話してもらった。また，再生課題では両材料ともに系列絵を 1 枚ずつ見せながら，験者がその内容を話して聞かせ，その後，絵を見せずに話してもらった。発話は IC レコーダーに録音し，すべて転記し分析資料とした。両材料は付録 1 に示し，それぞれの材料（10 枚の絵）を設定，目的，展開，結末の物語構造に分類した。絵に合わせたストーリー内容（18 項目）を筆者が操作的に作成し，基準として用いた（付録 2）。Frog とぞうさんのストーリーの構造は異なっていた。

3. 分析

各被験児から得られた発話データを筆者が品詞分析を行った。さらに，以下の言語構造的，内容と物語構造の側面から分析を行い，CA と比較した。

発話の長さの発達的变化については統語発達と関連しており，欧米圏では Brown¹⁾ の平均発話長（Mean Length of Utterances: MLU）という形態素単位による平均的な長さを指標とする場合が多い。膠着語である日本語の言語獲得では文法的最小単位で獲得していくとは考えられず，複数の語からなる一定の文節を定型パターンとして習得することが知られている。そのため，発話を一品詞より大きな言語単位すなわち自立語に分節化するほうが妥当であるとされ，助詞，活用形，接頭・接尾辞を除いてワード単位での分析を行っている^{16, 17)}。本研究では発話の長さの指標として産出された全自立語数を用いた。言語構造からの分析では（1）ストーリーを構成している自立語数すなわち名詞（連体詞，感動詞を含む），動詞，形容詞（形容動詞を含む），副詞，接続詞に分解した後にナラティブの長さの指標とした。また，（2）文レベルにおいて自立語から除いた付属語（助詞，助動詞，補助動詞）の使用を統語的指標として数量を求め，材料，課題ごとに比較した。物語の内容と物語構造の分析として（3）ストーリーの内容の出現率を年齢，材料，課題ごとに比較した。基準と異なる表現方法については内容を重視し，内容的に合っている場合はその内容が出現したとして評価した。たとえば内容番号①「蛙をつかまえてき」に対して「蛙がおった」，内容番号④「その間に蛙が逃げた」に対して「蛙がおらんくなった」の表現を当てた。さらに，（4）ナラティブで使用された新しい単語（異なり語彙）の数量とストーリーの内容の出現数を比較した。CA および VA は高い相関があったため結果は CA での比較のみとし，横断的に検討した。なお，本研究はデータ収集から分析まで筆者が行った。実際のデータ分析を付録 3 に示した。

結 果

1. ナラティブに使用された語彙と統語の分析

自立語数の年齢による変化は材料の異なる自発話課題では Frog ($r=0.37$, $p<.01$) およびぞうさん ($r=0.32$, $p<.05$) とともに年齢の増加とともに有意に自立語数は増加した（図 1）。同様に再生課題においても Frog ($r=0.42$, $p<.01$)，ぞうさん ($r=0.30$, $p<.05$) とともに材料が違っても年齢との間で有意な相関が認められた（図 2）。自立語数は Frog とぞうさんの自発話課題と再生課題での有意な相関 ($r=0.46$, $p<.01$) が認められた（図 3）。また，自発話課題と再生課題での Frog とぞうさんでも有意な相関 ($r=0.5$, $p<.01$) が認められた（図 4）。同一個人は課題（自発話と再生）や

自立語数

図1 Frogとぞうさんの自発話課題における自立語数
縦軸に自立数、横軸に生活年齢を示した。

再生課題

図3 課題別（自発話課題と再生課題）の自立語数の比較
縦軸に再生課題、横軸に自発話課題の自立数を示した。

自立語数

図2 Frogとぞうさんの再生課題における自立語数
縦軸に自立数、横軸に生活年齢を示した。

ぞうさん

図4 材料別（Frogとぞうさん）の自立語数の比較
縦軸にぞうさん、横軸にFrogの自立語数を示した。

材料（Frogとぞうさん）の違いによらず自立語数に高い相関があった。また、年齢群ごとの自立語数の平均を分散分析により比較したところそれぞれの年齢の水準での差異が認められたため、多重比較検定（Fisherの最小有意差法）を行った。4歳児群と5歳児群、4歳児群と6歳児群のすべての課題で有意差（ $p<.01\sim.05$ ）があった。さらに5歳児のFrogの自発話課題と5歳児のぞうさんの再生課題の有意差（ $p<.05$ ）があった。さらに6歳児群と5歳児群では6歳児のFrogの再生課題が5歳児群のFrogの自発話課題よりも有意に自立語数が多く（ $p<.05$ ）、また、6歳児群のぞうさんの自発話課題が5歳児群のFrogの自発話

よりも有意に自立語数が多かった（ $p<.01$ ）（図5）。

統語的指標として付属語数の数量を求めた。自立語数と付属語数は有意な相関（ $r=0.94$, $p<.01$ ）があった（図6）。

2. ナラティブの内容と物語構造の分析

絵に合わせたストーリーの内容はFrogでは設定①②③④⑤⑥、目的⑦⑧⑨⑩⑪、展開⑫⑬⑭⑮⑯、結末⑰⑱となっている。各年齢群でのFrogの内容の自発話課題での出現率は4歳児群では対象児の50%以上出現した内容はなく、30~50%で「ベッドで寝た」「二匹の蛙がいた」「たくさんの子どもの蛙が出てきた」「蛙

にバイバイして帰った」の4つの内容のみであった。5歳児群では30%以上出現した内容が10あり、6歳児群では13と年齢とともに内容が増加した。再生課題で30%以上の出現は4歳児群で4、5歳児群で10、6歳代で12あった。4歳児群では内容番号③寝たこと、⑮⑯蛙がいたこと、⑱バイバイして帰ったことを表現

した。5歳児群以上になると4歳児群の内容に加え、蛙が逃げていなくなり森に出かけ、蛙を見つけたことといった物語構造の目的、展開、結末の表現が出現した。

自発話課題と再生課題では4歳児群で設定部分の詳細（蛙がいないこと）の叙述が可能になったが、ストーリーの中盤の目的、展開などの内容が欠如し、設定と

図5 各課題および各材料の自立語数の各年齢群別の平均
4歳群と5・6歳群はすべての項目で有意差があったが、グラフ上では有意差を表していない。5歳児群と6歳児群では有意差表示を $p < .01$ を **, $p < .05$ を * で示した。

図6 自立語数に対する付属語数

表1 Frogのストーリーの内容

構造	Frogのストーリーの内容	自発			再生		
		4歳	5歳	6歳	4歳	5歳	6歳
設定	①蛙をつかまえてきた				○		◎
	②蛙を犬と一緒に見ている		○	○			
	③ベッドで寝た	○	○	○	◎	◎	○
	④その間に蛙が逃げた		◎	●		●	●
	⑤朝起きた			○		◎	◎
	⑥蛙がいない		●	◎	○	◎	○
目的	⑦家の中を探した					◎	○
	⑧長靴や瓶の中を探した			○			○
	⑨蛙がいない						
	⑩外に出た			○			
	⑪森に向かって叫んだ		◎	○			
展開	⑫池に落ちた		○	○			
	⑬木の陰から蛙の声が聞こえた		○			◎	○
	⑭木の陰をのぞいてみた			○		○	
	⑮二匹の蛙がいた	○	◎	●		○	◎
	⑯たくさんの子どもの蛙が出てきた	○	◎	◎		○	○
結末	⑰一匹もらった				○	●	●
	⑱蛙にバイバイして帰った	○	◎	◎			◎

対象児の75%以上出現した内容を●, 50%以上出現した内容を◎, 30%以上出現した内容を○で示した。

結末のみの出現となった(表1)。

一方、ぞうさんのストーリーの構造は設定①②③④, 目的⑤⑥, 展開⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭, 結末⑮⑯⑰⑱となつてゐる。ぞうさんの自発話課題のストーリーの内容の出現は4歳児群でも30%出現した内容は9であり, 5歳児群は11, 6歳児群は13であった。ぞうさんの再生課題では4歳児群で5, 5歳児群で11, 6歳児群で8であった。物語構造の設定部分の車にぶつかったということはすべての年齢群で高頻度に出現し, 救急車が来たこと, 鼻に包帯をまいてもらったこと, けがが治ったこと, お母さんが来たこと, 木の下にある家のことなど物語構造の設定, 目的, 展開, 結末について表現することが可能であった。絵からの叙述課題の自発話課題に比較し, 再生課題では4歳児群と6歳児群で内容が減少した(表2)。

両材料ともに4歳児群は内容の出現率は少なく, 5歳児, 6歳児群で増加した。また, 4歳児の自発話においてFrogよりもぞうさんのストーリーのほうが多い傾向があった。自発話と再生ではFrogでは内容の出現率に大きな変化はなかったが, ぞうさんでは自発話のほうが出現する内容が多い傾向があった。4歳児群ではFrogで目的や展開が欠如する傾向があり, 設定と結末のみの構造であった。5歳児, 6歳児群では

すべての構造でいずれかの内容で, 設定, 目的, 展開, 結末の構造が認められた。4歳児群でもぞうさんのストーリーではすべての構造が認められた。また, ぞうさんのストーリーの再生のみ, 内容の順番の逆転が4歳児で29例中5例(17.2%), 5歳児で23例中5例(21.7%), 6歳児で22例中1例(5%)あった。なお, 内容の順番が正しい発話例と内容の順番が逆転した発

図7 年齢別の各材料, 各課題の異なり語彙数の平均分散分析にてそれぞれの課題における年齢群間の有意差を $p < .01$ を**, $p < .05$ を*で示した。

表2 ぞうさんのストーリーの内容

構造	ぞうさんのストーリーの内容	自発			再生		
		4歳	5歳	6歳	4歳	5歳	6歳
設定	①道路に車が走っている			○		○	
	②小さな象が道路にやってきた						
	③象が道路を渡ろうとした		○	◎			
	④車にぶつかった	◎	◎	◎	◎	○	◎
目的	⑤鼻と足にけがをした	◎	◎	●		○	◎
	⑥血が出ている	○			○		
展開	⑦男の子が事故を目撃した						
	⑧男の子が救急車を呼ぶ		○	◎		○	
	⑨119番に電話をした	○	○	○		○	
	⑩救急車がきた	●	○	○		○	
	⑪象を病院に連れて行った		◎	●		◎	◎
	⑫看護師さんが鼻に包帯を巻いてくれた	○	◎	●	○	◎	◎
	⑬象のけががなおった	●	●	●		◎	○
	⑭お母さん象が探しにきた	○	◎	◎			◎
結末	⑮お母さんと一緒になった		○	○			
	⑯家は木の下にある	◎			○		
	⑰家に帰った			○	○	○	○
	⑱お母さんが車に気を付けるように言った					○	○

対象児の75%以上出現した内容を●, 50%以上出現した内容を◎, 30%以上出現した内容を○で示した。

話例を付録4にまとめた。

ストーリーの内容は産出される語彙との関連性が示され、異なり語彙数とストーリーの内容数は、いずれの課題、いずれの材料でもと有意な相関が認められた (Frogの自発話課題で $r=0.80$, 再生課題 $r=0.94$, ぞうさんの自発話課題で $r=0.67$, 再生課題で $r=0.93$)。また、異なり語彙数の課題と材料別の年齢群間の比較では4歳群で有意に少ないことが示された (図7)。

考 察

本研究では典型発達児のナラティブの研究において材料 (Frog とぞうさん) の違いと課題 (自発話と再生) の違いによるストーリーの語りの発達について検討した。絵を見てストーリーを語るとは、描写された絵から言語・非言語情報に基づいた文の構成に関連するメッセージレベルの表象を行う推論過程が含まれる。本研究の自発話の手続きにおいては最初に10枚の絵を見せ、その後に1枚ずつの自発話を引き出すようにした。子どもが全体の流れから必要な情報を絵から取り出し、場面の関連をつかみ、全体を統合して語りの構造として絵からの情報をまとめ、もっている言語で特定の視点から言語化する過程が必要である。すなわちナラティブには対人関係機能や検査課題の理解 (動機付けなど)、言語能力 (言語の形式的側面)、認知的側面を基盤として個々人の体験から描写された絵から言語・非言語情報を取り出してメッセージレベルの表象を行う必要がある。さらに各部分の詳細で明確な処理をしながら前後の絵から何が重要であるかを推論し、次に来る情報を予測し、前の情報を対照させながら必要な情報を取捨選択しなければならない。そして最後に物語構造として情報をまとめ、全体を統合する複雑な一連の情報処理過程である¹⁸⁾。

内田¹⁹⁾は、幼児の語りにおいて2コマの系列絵の叙述から子どもの物語ることの発達について詳細に分析している。2歳代では絵に制約を受けて列記的表現となり、3歳代では絵の内容を越えて想像したことを盛り込むことができるようになると報告している。3歳後半～4歳前半になると出来事を組み合わせることばで表現することができ、4歳後半～5歳前半にかけて事件を盛り込んだ物語構造の形式が可能になり、5歳後半に物語技法を用いて語ることができ、質的転換のときであるとしている。内田は、幼児期においてもかなりの説明技能をもち、原因が結果に先行するものであるという因果の理解は早くから可能であると述べている。しかし、結果が先にあり原因が後に来るといっ

た時間順序が逆になるように言語化することは難しく、5歳前半と5歳後半の間で質的転換の規定因の一つとしている。なお、内田の研究では男の子が石につまずいて転んで泣いたという事象の2枚の絵を呈示し、「まさおちゃんが石につまずいてころんだ」と表現することは容易であるが逆向呈示条件での「まさおちゃんは泣いている。石につまずいて転んだから」と表現できるか否か、おおよびどのように表現するかを検討している。

Slobin²⁰⁾は、Frogのストーリーを用いて5歳児と9歳児を比較し、5歳児におけるストーリーの構造が未発達であることを示唆している。5歳児は設定場面、内的状況、継続的な目標志向性、最後を最初の状況との関連で述べ、全体としては話が飛んで統合されていない。しかし、9歳児ではより精緻な設定場面や時間的推移、時間的な後戻り、出来事の動機や原因について語れるようになり、談話文脈のなかで語り手の視点などを投影し多彩な役割を担うようになるといった変化があると述べている。両研究から子どもの物語技法の発達について同じ方向性をもっていることが示唆されている。しかし、その発達の年齢は異なり、材料の長さや内容 (生活のなかで経験してきた事柄であるか、事物やことばの知識をもっているかどうか、ストーリーの因果的・時間的關係など内容と構造の複雑さ) によって影響されると考えられる。すなわち、物語構造や内容は年齢や個々人の言語や認知の発達全般との関係が大きいといえる。

本研究では材料の違いにおいて4歳児のFrogがぞうさんよりもストーリーの内容、構造ともに量、質ともに少ない傾向にあった。4歳児は登場するキャラクターへの親密度や体験からの情報や語彙の難しさがあり、細部の絵の描写の解釈が難しいため、絵からの情報の取出しや言語化する際のメッセージレベルの表象が難しいと考えられた。5歳児では4歳児同様、Frogがぞうさんよりも自発話が少ない傾向があったが、6歳児では再生においてFrogがぞうさんよりも自立語が多く産出された。年齢の増加とともに自立語数が増加し、最も詳細に語ることのできる6歳児でのぞうさんの自発話課題とFrogの再生課題の自立語数となった。6歳児の再生課題でFrogがぞうさんよりも自立語数が多くなったことは、本来のストーリーの構造においてFrogがぞうさんよりも情報処理が複雑で、かつ情報内容が多く、そのため多くの語彙が必要であると考えられた。

一方、ナラティブの年齢的な発達において年齢の増

加によって発達していくことを研究した文献は多い²¹⁻²³⁾。本研究でもいずれの材料、いずれの課題においても年齢の増加とともに語りの長さの指標である自立語数が増加し、内容についても徐々に充足されていった。4歳児においては十分なストーリーの内容を再生し、物語ることは難しいことが示された。5歳以上では徐々に材料による差異が明確になり、6歳では有意に材料間の差異があった。したがって、本来のストーリー内容の知識、内容量や構造の特徴によって、材料によるストーリーの複雑さが決定し、言語・認知・社会性の発達に伴い、語りの材料が本来もっている詳細な内容をもつ構造を産出することが可能となることが示された。年齢によってナラティブが発達することは示されたが、各年齢群ともに個人差が大きく、平均から外れる児やナラティブの産出が困難である児に対して、さらなる評価が必要であると考えられた。描かれた絵のストーリーを物語ることは、細部の絵の描写の解釈が難しい内容において出現率が低く、絵の描写といった視覚的情報処理もストーリー内容の記憶に関与し、ナラティブに反映する要素であると考えられた。

また、興味深いことにぞうさんの物語でのみ再生において4歳児、5歳児で内容の順番の逆転が多く認められた。親密度の高い日常的な内容ではみずからの経験も混じり、時間空間的な記憶とも関連し、混乱することが順番の誤りの原因と考えられ、物語の材料における内容の親密度は重要な要素であり、再生課題においては記憶や言語学習の発達との関連性が高いことが示唆された。

Alamillo ら²⁴⁾ は“Tom and Jerry”のアニメーションを材料にしたナラティブについて6歳児と10歳児を比較し、6歳児では発話の長さや内容において十分ではなく、他の文献同様に本格的なナラティブは学童期になってからであると述べている。学童期には時間的、因果的関係の表現の使用が可能となり、ナラティブにおいてたくさんの情報を産出できるようになっていく^{25, 26)}。しかしながら、本研究の結果から長さが短く高頻度でよく知っている内容で喚語が易しい内容であれば、5歳児以上の典型発達児ではある程度の発話の長さや内容のあるナラティブを産出できるようになると考えられた。

近年増加しているASDのナラティブの研究では標準化された表出面の検査において良好な成績を示してもナラティブの産出では物語技法や因果関係の叙述、ときには統語レベルでの貧困さがあり、質量ともに障害があることが報告されている¹⁰⁾。本研究では談話レ

ベルの評価として10枚の系列絵による2つの異なった材料を用いた自発話および再生課題での標準的長さと内容を示すことができた。今後、わが国における言語障害および社会性の障害のあるASD児の早期発見のツールとして有用であると考えられた。

結 論

ナラティブの能力は学齢期の教科学習能力との関連性があるとされている²⁷⁾。またASD児などのコミュニケーションの発達に障害のある児では、標準化された検査では明らかにならない場合があるが、談話レベルの評価によって言語能力ばかりではなく、記憶や推論および視覚的認知といった認知面、社会性や動機づけなどの情緒面も含み、多側面的情報処理が必要とされるため、障害の本質を明確にすることが可能である。ナラティブの評価は重要であるが、これまで典型発達児のナラティブの発達において明確な基準がなく、さらにわが国では語用論からのアプローチは皆無であった。本研究では典型発達児のナラティブの発達の標準的な結果を示すことができた。すなわち材料や課題によらず4歳児と5歳以上の発話の長さや内容は有意に異なることや個々の子どものナラティブの産出能力は、課題や材料によらず、ストーリーの長さや語彙数、統語において同一個人内での高い相関を示すことを証明した。ストーリーの構造や内容からその子どもの認知・言語・社会的能力の総合的能力が評価できるということを示した。さらに、個々の子どものナラティブの問題を質的に検討することによってその問題が社会性にあるのか、認知面にあるのか、言語面の語彙、統語、意味、語用にあるのかを検討することも可能である。ナラティブの能力を評価し、その後の発達の問題への介入計画において本研究は、子どものナラティブの発達について一つの基準を示すことができた。

本研究は平成22年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費助成の研究成果である。平成22年7月21日に研究Dコースの研究課題『語用論の発達：子どものナラティブの構造と形式について』として承認された。これによる利益相反はない。

また、本研究は平成23年12月7日に川崎医療福祉大学倫理委員会（承認番号294）によって承認された。

文 献

- 1) Brown R: A First Language: The Early Stages, Harvard University Press, Cambridge, MA, 1973.
- 2) Slobin DI: Crosslinguistic evidence for the language-making capacity. The Crosslinguistic Study of Language Acquisition (edited by Slobin DI), Lawrence Erlbaum

- Associates Publishers, Hillsdale, NJ, pp 1157-1256, 1985.
- 3) Ochs EL, Smith R and Taylor C: Dinner narratives as detective stories. *Cultur Dyn*, 2: 238-257, 1989.
 - 4) Mayer M: *Frog, Where Are You?* Dial Press, New York, 1969.
 - 5) Miles S and Chapman RS: Narrative content as described by individuals with Down syndrome and typically developing children. *J Speech Lang Hear Res*, 45: 175-189, 2002.
 - 6) Norbury CF and Bishop DVM: Narrative skills of children with communication impairments. *Int J Lang Commun Disord*, 38: 287-313, 2003.
 - 7) Reilly J, Losh M, Bellugi U, et al: "Frog, where are you?" Narratives in children with specific language impairment, early focal brain injury, and Williams syndrome. *Brain Lang*, 88: 229-247, 2004.
 - 8) Polanyi L: *Telling the American Story: A Structural and Cultural Analysis of Conversational Storytelling*, MIT Press, Cambridge, MA, pp 15-30, 1989.
 - 9) Gabig CS: Verbal working memory and story retelling in school-age children with Autism. *Lang Speech Hear Serv Sch*, 39: 498-511, 2008.
 - 10) Manolitsi M and Botting N: Language abilities in children with autism and language impairment: using narrative as a additional source of clinical information. *Child Lang Teach Ther*, 27 (1): 39-55, 2011.
 - 11) 茂呂雄二：児童の文章産出—短作文における文脈形成分析の試み. *教育心理学研究*, 30 (1) : 29-36, 1982.
 - 12) 西川由紀子：幼児の物語産出における「語り」の様式. *発達心理学研究*, 6 : 124-133, 1995.
 - 13) 斉藤佐和子：健常幼児の格助詞と態の表出—構文検査（斉藤私案）を使用して— . *音声言語医学*, 43 : 173-181, 2002.
 - 14) Shank RC and Abelson R: *Scripts, Plans, Goals and Understanding*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, 1977.
 - 15) 上野一彦, 撫尾知信, 飯長喜一郎：絵画語い発達検査, 日本文化科学社, 東京, 2008.
 - 16) 綿巻 徹: ダウン症児の言語発達における共通性と個人差, 風間書房, 東京, 259-281 頁, 1999.
 - 17) 小椋たみ子, 中 則夫, 山下由紀恵, 他：日本語獲得児と文法の発達—CLAN プログラムによる分析. 神戸大学発達科学部研究紀要, 4 (2) : 31-57, 1997.
 - 18) Joannette Y, Goulet P, Ska B, et al: Informative content of narrative discourse in right-brain-damaged right-handers. *Brain Lang*, 29: 81-105, 1986.
 - 19) 内田伸子：幼児における事象の因果統合と産出. *教育心理学研究*, 33 (2) : 124-134, 1985.
 - 20) Slobin DI: The development from child speaker to native speaker. *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development* (edited by Stigler JW, Herdt G and Shweder RA), Cambridge University Press, Cambridge, England, pp 233-256, 1990.
 - 21) Fitzgerald J, Spiegel DL and Webb TB: Development of children's knowledge of story structure and content. *J Educ Res*, 79 (2): 101-108, 1985.
 - 22) Hudson JA and Shapiro LR: From knowing to telling: The development of children's scripts, stories, and personal narratives. *Developing Narrative Structure* (edited by McCabe A and Peterson C), Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ, pp 89-136, 1991.
 - 23) Coletta JM, Pelling C and Guidetti M: Age-related changes in co-speech gesture and narrative: Evidence from French children and adults. *Speech Commun*, 52: 565-576, 2010.
 - 24) Alamillo AR, Coletta JM and Guidetti M: Gesture and language in narratives and explanations: the effects of age and communicative activity on late multimodal discourse development. *J Child Lang*, 40: 511-538, 2013.
 - 25) Hickman M and Hendrics H: Cohesion and anaphora in children's narratives: A comparison of English, French, German and Mandarin Chinese. *J Child Lang*, 26: 419-452, 1999.
 - 26) Berman RA and Verhoeven L: Developing text-production abilities across language, genre, and modality. *Writ Lang Lit*, 5: 1-44, 2002.
 - 27) Boudreau D: Narrative abilities. *Advances in research and implications for clinical practice. Top Lang Disord*, 28 (2): 99-114, 2008.
- 別刷請求先：〒701-0193 岡山県倉敷市松島 288
川崎医療福祉大学医療技術学部
感覚矯正学科言語聴覚専攻
小坂美鶴

“Frog, Where Are You?”

“ぞうさん故郷に帰る”

付録1 語りの材料

設定	① 1-1 蛙をつかまえてきた
	② 1-2 蛙を犬と一緒に見ている
目的	③ 2-1 ベッドで寝た
	④ 2-2 その間に蛙が逃げた
展開	⑤ 3-1 朝起きると
	⑥ 3-2 蛙がいない
結末	⑦ 4-1 家の中を探した
	⑧ 4-2 長靴や瓶の中を探した
	⑨ 4-3 蛙がいない
	⑩ 5-1 外に出た
	⑪ 5-2 森に向かって叫んだ
	⑫ 6-1 池に落ちた
	⑬ 6-2 木の陰から蛙の声が聞こえた
	⑭ 7 木の陰をのぞいてみた
	⑮ 8 二匹の蛙がいた
	⑯ 9 たくさんの子どもの蛙が出てきた
	⑰ 10-1 一匹蛙をもらった
	⑱ 10-2 蛙にバイバイして帰った

“Frog, Where Are You?”

設定	① 1-1 道路に車がたくさん走っている
	② 1-2 小さな象が道路にやってきた（迷い込んだ）
目的	③ 2-1 象が道路を渡ろうとした
	④ 2-2 （青い）車にぶつかった（ひかれた）
展開	⑤ 3-1 鼻と足にけがをした
	⑥ 3-2 血が出ている
	⑦ 4-1 男の子が事故を見た
	⑧ 4-2 男の子が救急車を呼ぼうとした
	⑨ 4-3 119 番（救急車のいる所）に電話をした
	⑩ 5 救急車が来た
	⑪ 6 象を病院に連れて行った
	⑫ 7 看護師さんが鼻に包帯を巻いてくれた
	⑬ 8 象のけががなおった（よくなった）
	⑭ 9 お母さん象が探しにきた
結末	⑮ 10-1 お母さんと一緒になった
	⑯ 10-2 家は木の下にある
	⑰ 10-3 家に帰った
	⑱ 10-4 お母さんが車に気を付けるようにやさしくしかった

“ぞうさん故郷に帰る”

付録2 絵に合わせたストーリーの内容と物語構造

付録3 実際のデータ分析

Frogの自発話課題の転記データ (CA6:03)

「これは まず かえる みよって こう 男の子が すわりよって 夜に なって 次は パジャマを 着て ねとった
ら かえるが にげようて 朝に なると おらんようになって また 朝 着替えて 長靴 はいて 外に 出て かえ
る 探して こう なっとるな (おったって) おって そんで おって もう 1回 もう 戻して 連れて 帰った」

- (1) 自立語ごとに分け、自立語数を数える (アンダーラインで示す)

*括弧内は言い直しのため分析から除く

- (2) 付属数を算出する (太文字で示す)

*方言は標準語に言い換えた形式にして文法要素を求める

すわりよって→すわって

ねとったら→ねてたら

にげようて→にげて

おらんようになって→いなくなって

- (3) 内容の分析 (18個の基準となる内容の番号のうち出現した内容)

②蛙を犬と一緒に見ている

③ベッドで寝た

④その間に蛙が逃げた

⑤朝起きると

⑥蛙がいない

⑩外に出た

⑮二匹の蛙がいた

⑰一匹蛙をもらった

⑱蛙にばいばいして帰った

付録4 内容の順番が正しい発話例と逆転した発話例

- (1) 内容が順番通りのナラティブの例

6歳3ヵ月: ①最初に道路がいっぱいあって、タクシーとか車がびゅんびゅん通って、③どうたんがな、渡りようたら、④車がばーんってぶつかって、⑧男の子が病院に⑨119番呼んで、⑫ぞうさんを優しいかんごくさんに包帯巻いて、⑬すっかりよくなって治って、⑭お母さんが来て、⑰帰った。

4歳5ヵ月: ③渡ろうとした、⑤けがした、⑧救急車を男の子が呼んだ、⑫包帯を巻いてくれた、お医者さんが、⑬治った、⑭お母さんがお迎えに来てくれた、⑱いっぱいおるところにはいかないって言ってた。

- (2) 内容の順番が逆転したナラティブの例

5歳6ヵ月: ぞうのお話、⑤ぞうがけがやった、⑩警察のあれ連れてきた、⑭お母さんが探しに来た、⑫かんごくかん治してくれた、⑧男の子が警察呼んだ、⑰ぞうなあれ連れてきてくれた。

4歳4ヵ月: ④車にぶつかった、⑩それで救急車に運ばれた、⑮ぞうさんがお母さんに会った、⑯それから木の上に⑰お母さんと一緒に休んだ、⑧男が救急車を運ばれましたって言った。

(発話の文(接)に付けた数字は付録2の発話の内容番号)